

—— 浮游 —— 塩川高敏展

画家・塩川高敏のライフワークとなったシリーズは「浮游」である。游（ゆう）の偏は「さんずい」であり、そこに画家としての意志が反映されている。画家の「水」への関心は強かった。長野の山に囲まれた環境で生まれ育った塩川にとって、初めて水平線を見た経験は鮮烈だったという。画面全体を横切る水平線は作品にもしばしば登場する。また、プールの中での視覚体験や瀬戸内の海辺の風景も繰り返しモチーフとなった。「水」。空気より比重の重い物質は身体を自由に浮かせ、透過、反射、屈折、……。水を介した光の現象は視覚像を自由に変形させ、新たなイメージの投影を誘発する。

その画業が終わりを迎えたのが2017年秋。1年3ヶ月の闘病生活ののち、その制作の円環は閉じられた。最後に描かれたのは雲のようなスケール感を持つ、国籍も性別も不明の人物がゆったりと画面を横切りながら遊泳する姿である。本展は、本来ならば、退任記念というかたちで開催されるはずであったが、遺作展として画家の軌跡を振り返りながら、その射程について再考を促す機会となる。

画家はいわゆる団塊世代で、学生運動なども間近で目撃し、その動向に肌で触れてきた。直接コミットすることはなかったが、社会の変化に伴う様々な矛盾や葛藤、そして、その後のバブルに向かう経済成長やその崩壊についても、思うところがあったという。画家は「バブルに差し掛かる時代、みんな地上5センチぐらい浮いて歩いているように見えていた」と語っていた。「浮游」というタイトルには実感から遊離してしまっているそのような現実に対する視点も反映されているのか。（90年代の主要作品《浮游》からおおよそ20年が経過した近作で再び「浮游」のタイトルが頻繁に使われていることも興味深い。）また、造形面においては、欧米の美術動向や時代の空気感なども創作に影響を与えているのを見ることができるはずである。さらに、関東時代と、尾道に移住してからの創作上の変化も見逃すことができない。

この度の展覧会では、主要作品とともにこれまで紹介されることのなかった初期作品や素描も展示する。画家の生い立ちと時代の空気との葛藤が、いまここで改めて塩川の作品と対峙する観客にどのように立ち現れるのか。長きにわたって教育の現場に立ち続け、尾道市立大学美術学科の設立にも尽力した画家・塩川の約60年にわたる創作の軌跡をたどる貴重な機会となることだろう。

プロローグ

最初期の作品を紹介。小学校高学年の時の作品（1958年）をはじめ、本格的に画家を志すきっかけとなった鉄工所を描いた高校生時代の作品も展示される。



油彩、キャンバス F60 (97×130.3cm) 1964年

浮游 I 1976-2000

風景（空、地面、都市）や人物像が解体・再構築された初期作品から、遊泳する人物が主役になり水平線が登場する浮游の代表作を展示。鎌倉、横浜にアトリエを構えていた頃制作した作品群。



「記憶された風景」油彩、キャンバス F130 (194×162cm) 1983年



「浮游」油彩、キャンバス F100 (130.3×162cm) 1993年

浮游 II 2001-2017

サボテン、人物、泡、雲が、瀬戸内の光の中で空間と渾然一体となっている作品群。モチーフの変遷やそこに注がれる光、イメージの変化も注目すべき点である。



「浮游・'17」油彩、キャンバス S100 (162×162cm) 2017年



「浮游・'17」油彩、キャンバス S100 (162×162cm) 2017年

風景

ヨーロッパへの数回にわたるスケッチ旅行を機に描き始めた主題。尾道に移り住んだのち数年は、特に集中的に瀬戸内の風景を描き続けた。風景のシリーズは主に尾道市立大学サテライトスタジオで展示する。



「ダム」油彩、キャンバス P120 (112×194cm) 2002年

素描

教育上もデッサンを重要視していた塩川は自身も数多くの素描を手がけた。モチーフに触れ、タブローに移行する前段階での画家の感覚の動きを確かめる上で、重要な作品群である。

(左)「デッサン」水彩、紙 (65.5×47cm) 1980年前半頃

(右)「植物園のデッサン」水彩、木炭、鉛筆、紙 (59.5×84cm) 1988年頃

